

異文化間コミュニケーション序説（その二）

——国際化と日本人——

白 水 繁 彦

III 異文化間コミュニケーションの障碍要因

この章では、日本人が異文化にある人々とコミュニケーションを困難にする際に問題となる、「コミュニケーションを困難にする諸要因」を抽出してみたい。序説であるので、網羅的に説明することになろう。すでにI・II章で事例的に紹介したことがらも随時引用しながら論を進めていききたい。

ところで、異文化間コミュニケーションを困難にする諸要因といえは、いろいろなものと考えられようが、ここで

は、社会学的・社会心理学的なものを中心に述べていきたい。先学によれば、こうした諸要因として様々なものが挙げられているが、ここではその代表例を三つほど掲げよう。先ず Barna は、

- 1 言語的問題
- 2 非言語的問題
- 3 先有傾向およびステレオタイプ
- 4 自分勝手な評価
- 5 過度の緊張・不安

といった五つを挙げている〔Barna:一九七二〕。そこではとりたてて、ある特定の文化の担い手（たとえば日本人）が

コミュニケーションする場合、といったような限定はなく、一般論として挙げられている。同様の分析傾向だが、コミュニケーションの前提となる、人々の社会的知覚に影響をおよぼす諸変数に注目して Poter *et al.*

- 1 態度（自文化中心主義、世界観、絶対的価値観、ステレオタイプ、偏見を含む）
 - 2 社会組織
 - 3 思考の型
 - 4 役割および役割規定
 - 5 言語
 - 6 空間の利用
 - 7 時間概念
 - 8 非言語的表現
- という八つを挙げている [Poter and Samover: 一九七六]。これもきわめて網羅的で、特別な文化のメンバーを想定しているわけではない。そのぶん抽象度も高いといえるのだが、われわれは、副題にも掲げたように、国際社会の中の日本人のコミュニケーション行動に関心がある。そういう視点から問題を扱った一人に、日米間のコミュニケーション・ギャップを扱った西山千せんがいる。彼によれば、

日米間の理解を妨げる要因として、

- 1 習慣の相違
- 2 主観（自分の思い込み、期待等）
- 3 ことばの表現法の相違
- 4 行動（非言語的表現を含む）
- 5 外観（物質的環境）

を挙げている〔西山…一九七二年〕。彼は、前の二人と違っていわゆるコミュニケーションの研究者ではない。だが著名な同時通訳者で異文化間コミュニケーションの実務家としては超一流の人である。その彼が、この分類に多少の問題はあるとしながらも、

ただ、私の見たり聞いたりしたコミュニケーションの食い違い、それから長年アメリカ人の組織のなかでアメリカ人と一緒に仕事をして経験したことを考えてみると、だいたいこの五つの分類によっていろいろな事柄をカバーできるように思ったので、このように要因を分けてみたのである。〔西山…一九七二年、七〇八頁〕

というだけのことはあつて、きわめて要領のよい分類となつてゐる。その意味でわれわれの作業にたいへん役に立つわけだが、ひとつ大きな難点がある。それは、西山の論が、日本とアメリカというきわめて限定した状態を扱つてゐることに起因する。たしかに限定的だからこそこの論は説得的である。だが一方で、アメリカを中心とした西欧先進諸国と日本人のコミュニケーションを考へる上では参考になるけれども、たとへばアジアを中心としたいわゆる発展途上国との関係には応用があまり利かないという憾みがある。とくに国際コミュニケーション(1)の研究によく見られるところだが、ここでは日本と欧米の関係をいかにすべきか、というところに重点があつて、日本の近隣諸国との関係を考へることがあまりに少なかったのではないか、という不満をわれわれは抱いてゐるのである。

むろん、そのような不満を西山の仕事に抱くのは筋違ひだが、われわれはそうした反省を踏まえて、欧米先進諸国との関係のみならずアジアの人々とのコミュニケーションのあり方も念頭におきながら論を進めていきたいと思う。

さて、このようなわれわれの立場を、前の Barua や Porter ら、および西山の立場との関連で図式化して述べ

るなら、われわれは、Barua や Porter らと西山の中間に位置するであろう。つまり、前二人ほど一般化して述べるのではなく、そこには「日本人が文化を越えるとき」という前提がある。しかしその日本人の相手が西山のようにアメリカといったある特定の文化に限らず、複数である。すなわち西欧先進諸国とアジアの発展途上国の両方を相手にしたいというわけだ。具体的には西欧先進諸国としては筆者が滞在したことがあるという理由でアメリカが中心的に引きあいに出されるであろうし、アジアからは朝鮮民族が引きあいに出されることが多いであろう。とくに朝鮮民族に関しては、いままであまりにもわれわれが無知であり続けた、という反省をこめてゐる。筆者は滞米中およびそれ以前から折にふれ資料を集めたり「韓国人」に會つて話を聞いてきたが、その度に自らの無知を恥じたものである。

(なお「韓国人」は民族としてみた場合、「朝鮮人」といふ言ひの方が適切かもしれないし、じつは日本人が植民地化したのは「朝鮮」全体であつた。しかしわれわれは今日の朝鮮民主主義人民共和国に関する資料を著しく欠いてゐるので、場合によっては「韓国」「韓国人」といふ言ひ方をすることがあることをおことわりしておきたい。)

以下、日本人が文化を越えてコミュニケーションをする場合に障碍となる可能性のある要因を、先の代表例などを参考にしながら考察していきたい。

一、態度

ここでは、ひとびとが接する人や事物、社会的な出来事に対して、そのものを詳しく点検することなく、あらかじめある種の傾向を設定してしまふような心理的狀態について扱う。

態度のなかでもとりわけ異文化間コミュニケーションに影響を与えるのは、自文化中心主義、優越感、ステレオタイプ、偏見、差別である。

(1) 自文化中心主義および優越感

自文化中心主義とは、自文化以外の人やものごとを判断する際に、自分の慣れ親しんでいる自文化の尺度を他の文化にも（無意識的に）そのままあてはめてそれを評価してしまふ心的傾向である。

これは日本人に限らず、多くの人々が陥りやすい心的傾

向である。とりわけ異質の文化に慣れていないか、または慣れていても「文化相対主義」をじゅうぶん理解していないと、つい自分勝手な判断をしてしまい、ひいてはスムーズなコミュニケーションを阻害してしまうことになる。前回（I章）にも引いたように、モスクワのあるホテルが一流といわれているわりには日本で慣れ親しんでいるシステム（つまりアメリカ式）と違うために、ずいぶん印象を悪くしてしまつた筆者の例でもわかる通り、きわめて身近なところでこつした誤解は起るので注意を要する。

この自文化中心主義がとりわけ顕著にあらわれるのが Parsons, T. もいうように、「宗教的教条主義」religious dogmatism である。宗教的熱情にこり固まつて、他の宗教に属する人々を見ると彼らに対して敵意を抱いてしまうのみならず、相手の文化の他の側面まで悪く解釈してしまふことがある [Parsons: 一九六四年、五〇〇頁]。とくにその宗教集団が、初期の段階にあるときは、拡張する意欲が強いあまり、つい他宗教のものを極端に輕蔑することがある。一例をあげればキリスト教にしても、初期にはキリスト教に帰依しないものを野蛮人と見なしたことがある。

日本人のばあい、この宗教的熱情とは、一般にあまり関

係ないと考えられるかも知れない。名にしおう「無宗教」の人間がほとんどだから……。しかしやはり「無宗教」(というよりは宗教に関して無関心)であるが故の問題もある。米国での話だが、最近イランからの留学生が多く、(もちろん日本人留学生も相変らず多いのだから)必然的に両者が接触する機会も多くなる。イランからの留学生の多くは敬虔なイスラム教の信者で、豚肉を食べないし、中にはどんなことがあっても朝夕の祈りを欠かさないものもある。そうした彼らの行動が日本人留学生にはどうしても理解できない。もし自分がある宗教を信じているか、深く関心をもっていれば、たとえ他の宗教であっても彼らの心情には思いが至るだろう。ところが日本の典型的な若ものである留学生の中にはむしろこう考えるものがある。

「こんなに宗教に束縛されているからいつまでも工業化できないのだ。いつまでたっても後進国なのだ。こうした遅れた国がオイルダラーを集めて軍事強国になるのはかわかない。遅れている連中なのだから何をしでかすかわからないではないか。」

これは実際に筆者が二〇歳になる留学生から聞いた意見である。しかも彼はアメリカのある大学の日本人留学生の

リーダー格の男であった。こうした態度は後で述べる「偏見」と密接に結びついており、宗教に対する偏見が文化の他の側面への敵意軽蔑にまで拡大される一例である。

ところで日本人も宗教的熱情を持ったことがあった。第二次大戦・前戦中において占領地で天皇崇拜、神社参拝を強制したことがそれである。むろんこのときは、「宗教的熱情」が超国家主義によって裏うちされていたという意味で一層近所迷惑なものであった。

「日本は、占領地で天皇崇拜と神社崇拜さえ強制しなければもっと評判が良かった。日本の神様などというものは我々と何も関係ないのだから……」というインドネシアとマレーシアの人の話(戦争直後)には考えさせられる。「長坂…一九七七年、一二二～一二三頁」

自文化中心主義との関連で忘れてはならないのが優越感の問題である。とくに日本やアメリカ等のように高度に工業化した体制に住んでいる人間は、それがあたりまえのことと思うと同時に知らず知らずのうちに、自分たちの文化すべてが発展途上国のそれに優越すると考え違いしがちな

ことである。かつて日本が「先進国」の仲間入りをせんと必死で頑張っていたころ、「日本の製品は cheap である。」つまり「安っぽく」どうも「インチキくさい」と欧米諸国に言われたものである。そのとき悔し涙をのみ、やっとここ数年その汚名を返上しつつあると思ったら、何のことはないその日本人が、こんどは韓国や東南アジア諸国に優越意識をちらつかせることになってしまった。

最近の若い韓国の人の中には、何の先入観も持たずに日本を理解しようとして日本に来る人もいますが、そういう人が反日になって帰る原因は、何よりも日本人の優越感がコッソンと来るからで、これに反発しているうちに日本人の韓国蔑視、偏見、差別のどうしようもない深さに気がついて、日本人を本当に憎むようになる過程をたどります。そして日本人は韓国人が日本人を憎むということが原因で、韓国人を憎み返すことになります。〔長坂：一九七七年、一三三八頁〕

韓国に長く滞在した外交官だけあって優越感が、偏見、差別といった事柄と表裏の関係にあり、結局憎み憎み返す

という悪循環を繰返してしまうというしくみを看破している。

このような自文化中心主義や優越感と密接な関係にある態度の諸側面を次にみてみよう。

(2) ステレオタイプ、偏見および差別

ステレオタイプも態度の一種だが、これは他の文化に属する人たちについて、十把ひとからげにもつ信念と期待である。一般にはその人たちと直接つきあう経験をしないうちに学習されているものである。——大ていの民族集団や社会階層に属している人間は他の集団、階層に対してきまってきた先入観をもっているものだが、こうしたステレオタイプは、所属集団あるいは文化の「伝統の一部」となっている場合が多く、その新しい成員に対しては、社会化の過程を通じて教えこまれるわけだ。

ステレオタイプの具体的な例としては、

「アイルランド人はみんな赤毛（頭髮）で怒りっぽい」

「日本人はチビでぬけめがなくなる」

「ユダヤ人はみんなずる賢く、ケチだ」

「黒人はみんな迷信深くて、なまけものだ」

等々、あげていったらキリがないほどだ。ここにはたまたまアメリカで行われているステレオタイプを挙げたが、どちらかといえばネガティブなものばかりになってしまった。ステレオタイプは何もネガティブに限らず、価値的に中立的なものもあり、ポジティブなものもある。またこれらのように他の民族集団に対するそればかりではなく、同じ民族集団の中でもたとえは性のちがいによって、「女はエモーションナルで論理的な思考に向かない」とか、出身のちがいによって「九州人は封建的で血の気が多い」といった先入観があるとすれば、それはステレオタイプと呼んでよからう。

ところで、ある種のステレオタイプは完全にまちがっている、というものもあるが、なかには一部真実を含んでいるものもある。しかしたとえ一部が真実であっても、当該社会(文化)の人間を一律に「ある規準」で評価してしまうのはなほ危険なことである。ステレオタイプによって切りすてられる個人差は無視できないほどに大きいのだ。そうして、コミュニケーション過程におけるステレオタイプのもつ問題は、それがあつた個人(相手)をより正確に理解しようとする際、大きな障碍となることである。つま

りコミュニケーションする以前から相手に対してある一般化が行なわれているわけだから、事前に「期待」ができあがってしまふ。要するに無意識のうち、いわゆる「色めがね」をかけて相手を見ることになってしまふのだ。

さてつぎにこうしたステレオタイプと切り離して考えることのできない偏見と差別について考えてみよう。この三つの概念は明確に相違を述べることとはできないが、その關係を簡単にいえば、偏見は、蔑視的なステレオタイプと悪意のある感情(態度)から成り、差別は偏見に基づく行動であつて、例えば、単に女性であるという理由や、在日朝鮮人であるという理由で就職の機会が与えられないようなものである。

さらに、差別と偏見について特色ある意見をもつ鈴木によれば、偏見とは、

誤つた、柔軟性のない、一般化にもとづいた非友好的な態度、つまり集団全員に対してか、その集団のメンバーであるという理由だけで、ある個人に対して好意的でないか不利益をもたらすような仕方、知覚したり感じたり考えたりする傾向(鈴木一九七三年、二

であるという。

また Allport, G.W. は「まや古典的著作となった『偏見の心理』のなかで、偏見を定義して次のようにいっている。

偏見とはある集団に所属しているある人が、たんにその集団に所属しているからとか、それゆえにまた、その集団のもっている嫌な特質をもっていると思われるのかという理由だけで、その人に対して向けられるけんおの態度、ないしは敵意ある態度である。〔Allport: 訳一九六一年、七頁〕

Allport は「ステレオタイプに関しては、好意的、非好意的を問わず、カテゴリーと結びついた、誇張された所信である〔同書一六八頁〕、としているから、やはり偏見をステレオタイプのなかでもある一方にとってネガティブなもの、という立場と同系列にあると考えてよからう。

もちろん偏見の例は数限りなくある。

「世界あらゆる場所における人種問題というものは偏見の問題以外の何ものでもないような気がしています」〔長坂一九七七年、七九頁〕という意見もあるほどだ。もっともこの場合は、偏見を広く解しているわけだが、それにしても長坂はウンザリするほどその実態にふれてきたようだ。そうして偏見はそれが行動としてあらわれると差別となるのである。

偏見と差別は、やはりスムーズなコミュニケーションをさまたげる大きな障碍となる。それらは、ステレオタイプや自文化中心主義と同様、コミュニケーション過程のうち解釈 (teaching) の段階で、その解釈をあらまらせてしまう可能性がある。先のI章のコミュニケーション過程の図式でいえば(5)の「送り内容」が、受け手の側の勝手な先入観のために歪められ、結果的に「受けとり内容」に大なり小なりズレが生じるというわけである。とくに差別は、差別をされる側がコミュニケーションを拒否する可能性もあるわけだから、最悪の事態はコミュニケーションの断絶ということも考えられる。そうなれば互いに誤解を抱いたまま対立してしまふことになる。

日本人の偏見・差別を具体的に見てみよう。I章でも引

いたブラジル日系人の処遇は、偏見に基づく差別といえるものであった。さらにインドネシア人に対する一部現地日本人（多くが駐在員）の態度も同様であった。こうした例に加えて国内の少数民族（在日朝鮮人、在日中国人、アイヌ等）への偏見・差別がときとして目や耳を疑いたくなるほどひどいものであるのは、だれしもが経験するところであろう。⁽⁴⁾

ところで、いろいろな国の人々といろいろな態度で接する日本人であるが、そこにひとつの傾向性が見出せるようだ。いまあげた民族集団に加えて韓国、台湾、フィリピンの人々への偏見・差別は、第二次世界大戦中は無論のこと戦後も続いているようだ。ひとくちに言ってそれらの国々は「発展途上国」である。それに比べてアメリカを中心とした西欧諸国に対しては偏見が全くないとは言えないが、「発展途上国」へのそれに比べれば雲泥の差であると言っ
てよからう。西欧、アメリカに対しては、むしろ、片思いにも似た敬愛の念の方が強いのではないか。むしろそうした好意的な態度の深層には劣等感がある。だからこそ、その補償として「発展途上国」への優越感が噴出するのではないか。先の自文化中心主義のところでも述べた「優越感」

は、日本人の場合、このように屈折した構造をもっている、ということを確認しておく必要がある（日本はむしろアメリカなどの「先進国」からは偏見の対象であった。詳しくは〔Johnson:一九七五年〕参照）。

加えて、こうした態度は、ステレオタイプの定義のところでも述べたように「われわれの文化の伝統の一部」となっているわけで、世代を超えて伝承されるという性格もっている。つまりきわめて根が深いわけだ。また、とりわけ朝鮮やフィリピンに対しては戦前・戦中と相当自分勝手なことをしたために、こんどは日本人が逆に彼らから非好意的な民族感情を持たれることになってしまった。こうした国々との交渉が国レヴェル（いわゆる外交）ではそれなりの成果を収めつつあるように見えても、民衆のレヴェルでは相変らず悪感情が残っているのは、われわれのような異文化間コミュニケーションの立場をとる場合きわめて残念なことだ。まさに入谷も言うように「過去の歴史を通じての辛酸を体験している国家同士の感情は世代を通じて伝承され、容易に消滅しがたいものを残している」（入谷…一九六九年、三六三頁）のである。そういう意味では、筆者が旅行して感じた、東欧社会主義諸国の民衆に沈澱するソ

連に対する非好意的な感情も、これと同列にあるものと言えよう。

少し悲観的な事例をならべすぎたかも知れないが、明るい例もある。まさに、国際化時代にふさわしい日本人像とも言えるような人が戦前・戦中のあの「帝国主義の時代」にもいたのである。

例えばかつての大記者松本重治の場合。彼は関東軍の参謀と人間観をたたかかせている。その参謀は松本にむかって「君は中国人を人間として扱っているが、僕は豚だと思っている。やっちまえばいいんだ」と言ったという。松本は「いかにも私は中国人を人間と考えている……」と反論するが、その勇氣と視野の広さは見ならう必要がある。

また西阪豊という日本人は、「日韓併合」前夜のソウルで通信社を設置し、日韓両国民間の誤解を解き、東洋平和と韓国の独立のために貢献しようとする努力していたのだが、保護条約（いわゆる日韓併合）の調印を見て、こと志と異なるのに失望して割腹自殺をはかったという〔長坂・一九七七年、三二頁〕。明治の男の氣骨と底ぬけの善意が感じられる話である。

これに似た話では、若き日の柳宗悦が朝鮮人にむけて著

した文章がある（大正八年）。彼は、誇るに足る文化を持つ朝鮮民族が、日本の帝国主義的政策によって苦しめられ、ナショナルアイデンティティの危機にさらされている様を描いたあとで、こう書いている。

吾々とその隣人との間に永遠の平和を求めようとなれば、吾々の心を愛に浄め同情に温めるよりほかに道はない。併し日本は不幸にも刃を加へ罵りを与へた。之が果して相互の理解を生み協力を果し、結合を全くするであらうか。否朝鮮の全民が骨身に感じる所は限りない怨恨である、反抗である、憎悪である。分離である。独立が彼等の理想となるのは必然の結果であらう。彼等が日本を愛し得ないこそ自然であつて、敬ひ得るこそ例外である。（中略）

朝鮮の人々よ、よし私の国の識者の凡てが御身等を罵り又御身を苦しめる事があつても、彼等の中にこの一文を草した者のある事を知つてほしい。……かくて吾々の国が正しい人道を踏んでゐないといふ明らかなる反省が吾々の間にある事を知つて欲しい。私は少しでも御身等に対する私の情を披瀝し得るなら浅からぬ悦

びである。(一九一九・五・十二)⁽⁶⁾

柳宗悦が単なる国粋者でなかったことはもちろんだが、今日の言葉でいえば「文化相對主義」のみごとな体現者であることがわかる文章である。

植民地時代の日本人の中にも、多数ではなかったかも知れぬが、頼むに足る人間がいたことがわかった。(なお、日本人の朝鮮觀の変遷は〈旗田・一九六九年〉が詳しい)。しかし、松本といい西阪といい、まして柳といわれわれ民衆とはかけはなれた存在、いわば天才的な人間だったのでないのかという疑問は残る。幼少時より学習してしまったステレオタイプ・偏見は消せないのではないか。そうしてその偏見をもつ態度が改められない限り差別の行動は変わらないのではないかとという疑問が残るだろう。しかし、いくつかの社会心理学の知見によれば、偏見をもつ態度と差別は一応分けて考えることもできること(つまり偏見をもつていても差別という行為は、民主主義が徹底してくると実際上できない)、さらに、好ましい条件のもとで人種間(例えば白人と黒人)の接触を強いられた人々はしばしば偏見をもつ態度を改める。具体的な事例として、公共アパートに入居

させられた人々は黒人も白人も実際に交際を重ねていくうちに、多くの人が人種間の接触を楽しむようになったという調査結果がある〔Deutsch and Collins: 一九六五年〕
〔同、一九五一年等〕。

つまり、とにかく接触してみることから偏見を乗り越える第一歩が始まるということは言えそうである。では日本人は積極的に異質の文化の人々に接するような性格をもちあわせているだろうか。先にあげた西山千の父親は典型的な明治男の日系アメリカ人(二世)であったが、あるとき西山少年が公営プールに入れてもらえないという差別に遭ったとき、差別した白人を怒るより逆に西山少年に向かって「そもそも入場できないプールに入ろうとするのが悪い」「そんなことをするから、あれだけ大勢の人に迷惑をかけたし、入場を拒まれる恥をかいたではないか」と言ったという。つまり「恥」とか「人に迷惑をかける」とか「問題を起す」ということは、最大の罪惡の部類に入るという意識が強烈であったという〔西山・一九七二年、四八〜四九頁〕。これがいわゆる「静かなアメリカ人」といわれた日系アメリカ人の実態である。ここには「接触(この場合は摩擦と言つてもよい)を避けよう」という行動傾向と、で

きるだけ「言^{ことば}挙げしない」という行動傾向が見られる。日系一世は、とりわけ日本人の行動傾向を残しているといわれるが、これらはもしかしたら、異文化間対立や誤解の眞の解決を、導きにくい行動傾向なのではないか。先の知見によれば、とにかく接触してみても、問題の所在を双方が自覚するところに解決の第一歩があった。

このように考えていくと、どうやら「日本人の多くが持っている、しかも日本人に特有の社会的性格」(国民性)の中にもスムーズな異文化間コミュニケーションを妨げるものがありそうである。つぎにそれらのいくつかを点検してみよう。

二、国民性

(1) 「言挙げしない」「摩擦を避ける」

いま事例を引いたように、意見が対立したときに徹底して論じあうよりも、そういう場面が生じる前に、自分を犠牲にしても対立を回避してしまおうとする行動傾向、これは世界の主な民族の中では日本人に特徴的なものである。ヨーロッパ人にしろアラブ人にしろ南北アメリカ人に

しろ、中国人にしろ、そうしてあれだけいろいろな面で日本人と似た行動傾向をもつ韓国人にしろ、問題点は、はっきり提示し論じあうというのが一般的である。

こうした日本人の行動傾向は、「話さないでもわかる」という観念と不可分のものである。いわゆる「言挙げ」をしない。この「言挙げをしない」ことは日本人の間では美德かも知れぬが、国際社会にあっては、自らの意見は言わねばならぬ。「以心伝心」でコミュニケーションするには、世界はあまりに慣習、価値、常識等(要するに文化)が違すぎる。

もちろん以心伝心に似たことはどんな民族の中にもあるだろう。家庭とか定住的なコミュニティといった対面的集団(face-to-face group)にあっては、何から何までいちいち説明しなくても、ある程度了解事項が成立しているのが普通である。ただ日本の場合の特徴は、それが、外集団(out-group)にまで適用されるところにある。これも「単一民族」という共同意識及び「異質の集団によって決定的な侵略を受けたことがない」という民族史と深く関わりがあることであろう。これが同じ儒教の影響を強く受け、「辞讓の徳」⁽⁸⁾をもって鳴る韓国においてさえ、ふだん大変おし

とやかな女性でも、言うべきことはちゃんと主張するようだ。金烈生によれば、

一見おしとやかだが、韓国女性は、言うべきときには言うべきことを、きちんと口にする。これは男性でも同じことだが、異民族相手には、以心伝心は通用しない。或るところで、譲れることと、譲れないことを、分明にしておかないと、異民族からなにをされるか判らないという歴史を経験している。「金…一九七八年、三八頁」

ということになる。さらに日本人と韓国人の社交性にふれて、

(欧米人が)同じ東洋人でも韓国人は日本人より社交性が豊かだという。……

たとえば、西ドイツでは、同じ東洋人でも、日本人か韓国人かは話してみればわかる。はっきり言わないのが日本人だといわれているそうだ。これなど多少極端な話としても、アメリカの『ニューズ・ウィーク』

誌が最近組んだ韓国・日本についての特集のなかでも、両国民の国際性についてふれ、国際性という点では韓国人が日本人を上回るといふ判定を下している。
〔同書、六四一―六五頁〕

と、自画自讃しているが、たしかに個人の国際性を比較してみれば順当な意見であろう。一般にアメリカ人や韓国人は「個人」で、仕事をする¹¹が、日本人は「集団」で力を発揮する¹²といわれるのも右のことと関連していよう。

(2) 「片想い」「甘え」「義理」

これらは「国民性」という言葉で呼ぶのはあまり適当でないかも知れぬが、日本人の対外態度を述べる際無視されない行動傾向である。

日本人はながいあいだ高文明の国に顔を向けてきたが、ここ百年余りは、欧米に一方的にあこがれ続けてきた。とりわけアメリカには、戦後援助をしてもらったこともあり、特殊な気持で接してきた。むしろアメリカにとつては、日本は彼らの多くの友好国のひとつにしか過ぎないのに敗戦直後はアメリカに「親分」というような感情でとら

えたし〔西山…一九七二年、四〇〇一頁〕、その後ずつと「自分だけのアメリカ」と考えたふしがある。いわば「片想い」である。だからニクソンが「ぬきうち」に中国を訪問したとき、日本ではニクソン・ショックと呼ばれるほどの経済的混乱をきたしたし、「頭越しの外交」といって彼の不実を詰つたのである。

しかし考えてみればニクソンは、日本に限らず、すべての友好国に知らせずにやつたにすぎない。日本にだけ知らせるわけにはいかないのがアメリカの立場であり、外交上の戦術であつたのだ。

また、とくに最近のように日本の工業力が強まり、経済力がついてくると、アメリカ市場が無制限に日本の輸出品を吸収してくれるという「甘え」の意識は通用しなくなる。「十数年間、日本人の甘えとアメリカ人の論理とが比較的うまくかみあっていた状態が、さらに年月を経ると、実は全然食い違っていたという事実として表面に現われてきたのである」〔西山…一九七二年、四二頁〕。

また、アメリカ等西欧諸国への「片想い」の一方で、アジアに代表される「発展途上国」への無関心、無知も深刻な問題である。さらに「義理」の観念が、いろいろなところ

ろで通用すると思うのはまちがいである。⁽¹⁰⁾ たいていは、物質的、精神的給付に対してはそれにふさわしいだけの反対給付が行われる。大体、短時日のうちにオブリゲーションの解消が行われると考えてよい。アメリカ人などその最たるもので、何かものを贈っても、お礼の言葉か、同じ程度のも物が返され、それで終りである。日本人のようにいつまでも「このあいだはどうも……」というようなことはないし、ましてや、様々に行動を規制してくる、というようなことはない。ただし韓国においては日本と似た義理の観念をもっているようである〔崔在錫…訳一九七七年〕。

(3) 「せっかち」

日本人はたいてい自ら「せっかちな国民性」であることは知っている。しかし現実の場面では、自らの行動がそうだと気がつかないことが多い。例えば金山宣夫は日本人のせつかちと契約概念を以下のように紹介している。よくある話だが、ある製品を海外で売り出すのに、最初は土地不案内だから外国の代理店を使う。ところがそのうちに事情がわかってくると、自分でやった方がよいと考え、代理店におおりをかけたり、ついには独自の流通経路の開拓を

はじめ。それは契約条項に触れることであり、相手の反発を買う。そのときに日本人にとって問題なのは、相手のスローペースであって、自分の「せっかち」ではない。

また、ときには契約を破るのではなく、それを守っているのに相手の反感を買うことがある。たとえば代理店契約の更新の申入れにはいっさい応じずに、契約期限が来ると、待ち構えていたように、直販店の店開きをするような場合がそうである。日本人のほうでは「契約さえ守れば文句をつけられるいわれはない」という理屈だが、相手にとってみればそれなりの資本もかけているし、「二階にあがってハシゴをはずされた」と感じざるを得ないだろう（「金山」一九七八、七八頁）。この場合は日本人の「せっかちさ」に加えて、先に述べた自文化中心主義という心的傾向が追いうちをかけている例である。

(4) 「歴史軽視」

これも国民性とは呼びにくいものだが、日本人の国際理解を妨げている大きな心理的要因のひとつである。日本人は自分に都合のいいときは「大和民族二千年の歴史」などと言いたすが、その実、自分たちの歴史のみならず、当該

民族の歴史に深い関心と尊敬を払わない傾向がある。⁽¹¹⁾これは日本人の世代を通じて言えることだが、とりわけ、若い世代に顕著なのではないか。こうした無神経な態度が、かつて日本帝国主義が迷惑をかけたところの人々との間に深い落差をつくってしまいうひとつの原因になると思われる。たとえば長坂はつぎのように言っている。

私はつねづね感じているのですが、どうも民族の歴史について、現在の日本人と、韓国人を含む世界の他の国の人との間に、感覚の差があるようです。この関心事件⁽¹²⁾一つをとってみても日本人は「何だ昔の話じゃないか」という感じですが、韓国人は、現在の日韓関係の背景をなす一要素として考えているようです。

〔長坂：一九七七年、二一九頁〕

加害者の方は世代交替とともに忘れ去るが、被害者の側では世代を超えて、反復して語りつがれるという傾向は一般的である。他民族の歴史といえども「知らなかった」ではすまされない場合が多々あるのである。

(5) その他

その他に、この「国民性」のカテゴリの中に入れる必要があるものに、日本人の「幼児的性格」(未成熟)がある。つまりあまりに長いあいだ国際体験に乏しかったものだから、すっかり「世間知らずの国」⁽¹³⁾になってしまったのである。この場合の世間とは異文化のことだから、まったく異文化の衝撃に弱い、神経症的性格のお坊ちゃんができあがった。

また、アメリカ人や日本人に共通してみられるという「一方交通思考」〔中津・一九七八年、三二八～三二九頁〕もこのカテゴリに入れておくべきであろう。この他にもいくつか日本人の国民性に由来する、異文化間コミュニケーションの阻害要因が考えられようが今回は割愛する。

三、言語的表現

言語は人間のコミュニケーションの重要な手段として発達してきた。そうしてかなり抽象度の高いものまで表現できるところまでできているはずであった。しかし同一文化の中にあってさえ、個人的な経験の違いによって「送り内

容」と「受けとり内容」との間にかなりな落差が生じる場合がある。ましてや異文化間のコミュニケーションにおいては「誤解」が生じることは覚悟しなくてはならない。その上で、その「誤解」を最小限にいとめるよう注意を払わなければならない。

異文化間コミュニケーションにおける言語表現のもつ困難の原因のひとつは、その語や文章の究極の意味が文化によって決定されるところにある。たとえば先祖という単語ひとつとってみても、北米のアメリカ人は、どこかアメリカ以外の国から来た遠い親戚という感じでそれをとらえるだろうが、韓国人ならば超自然的人格をもった、しかも神のような地位をもつ神話的人間としてそれをあがめるだろう〔Porter and Samovar: 一九七六年、一八頁〕。

このように単語ひとつとってみてもそれによって知覚されることながら文化によってこれだけ違う⁽¹⁵⁾のだから、文章においてはさらにそれが甚だしくなることは容易に予想できる。日本人が気をつけなければならない言語表現は、単語や短い文章にあまりに多くの意味を内包させがちな点である。そうした精神は俳句や和歌といった短詩形文学を発達させた、という効用はあるが、先の以心伝心のところで

もふれたように、異文化とのコミュニケーションにはあまり向かないと考えた方がよい。

また、直接的に否定することを避けるために、あいまいな表現をするだけで否定したつもりになっていたり、ときとして字づらとは正反対の意味を内包させたりすることがあるが、これは大きな誤解のもととなる。有名な例では、一九六九年の佐藤・ニクソン会談がある。席上ニクソンが日本の繊維輸出の自主規制を要請した際、佐藤は「考えておきましょう」と応えた。ニクソンはそれを「Yes」と解釈して期待していたのだが佐藤は何もしない。ニクソンは怒ってしまった、という話である。日本人同士のような心持で話をしていると、このような誤解は数限りなく起る可能性がある。⁽¹⁰⁾

四、非言語的表現

非言語的表現 non-verbal expression は、言語を用いなく、すべての意志伝達方法を含む。具体的には顔の表情、身ぶり（手ぶりを含む）、服装、姿勢等が用いられる。だからときにはコミュニケーションの送り手自身が気付かない信号さえある。

非言語的表現の研究は比較的はやくから行われていたが本格化したのは大変新しく、とりわけ異文化間コミュニケーションの分野では E. Hall の『沈黙の言語』（一九五九年）をひとつの契機とするから二〇年そこそこの歴史である。

言語の項でみたように、この非言語的表現もその意味が文化によって決定されるので、文化を超えて解釈する場合にはほど注意しなければならない。たとえば会議などとてもくに重要となってくる “No” と “Yes” の表現は、前者が首をタテにふり、後者が首をヨコにふる、という具合にさまざまであれば問題はないのだが、実際は文化によって様々なやり方がある。

日本人の非言語的表現として問題になるのはやはり顔の表情である。なにしろ苦しい（または悲しい）ときに、微笑さえうかべるのであるから。⁽¹¹⁾ 身ぶり手ぶりに関しては、各マス・メディアおよびマス・ツーリズムの影響もあってか、世界的規模で欧米的なやり方が普及しつつあるようだ。日本でも若ものの身ぶりは欧米にずいぶん近いものになってきた。とは言え、非言語的表現は異文化間コミュニケーションの際充分気をつけなければならない分野であることは言うまでもない。

五、空間の利用、時間概念のちがい

これらも E. Hall が喚起した問題である。空間はまるで声の調子のようにあり、言葉のように、フォーマル・インフォーマル、あたたかい・冷たい、男らしい・女らしい等々といったことを表現するという [Hall: 一九六〇年、四一〜四二頁]。また人と対面したり、列にならんだけする場合の距離も文化によってずいぶん違うものだ。日本人はこうしたことにあまり気付く機会がないが、慣れないと驚くときがある。筆者は滞米中多数のイラン人につきあったが、最初は彼らがやたらと接近してくるのでバツの悪い思いをしたものだ。彼らがひどくくっついてくるからといって、ある特別な感情をそれで表現しようとしているのではない。ややもすると勘ちがいしそうである。

「時間概念のちがい」これも文化によって違いがあるとわかっているながら、つい見落してしまいがちな点である。とりわけ日本人は、先の国民性のところでも見たように、せっかちであるから、イライラしてしまうことも多いだろう。時間概念は大きくわけて二通りある。ひとつは、それを過去・現在・未来と続いていく一直線のつらなりとして

とらえるもの。いまひとつは、時間は無限である、という考え方である。後者のばあい、あるのは「今」この瞬間であり、感覚的時間とでも呼んでよいようなものである。前者は西洋に代表される先進諸国がこれに入り、日本人なども現在こういう時間の感覚をもっているが、かつてはどうも違ったらしい。つまり、日本の禅などでは時間は無限の池のようなもので、そこで出来ごとが起り、さざ波のものととなり、そして沈む。そこには過去もなければ現在もなく、まして未来もない。あるのは全き現在だけ。その現在で出来ごとが起る、というのである [Porter and Samover: 一九七六年、二〇〜二二頁]。時間概念は筆者の見るところ産業化の進展と深い関連があるようだ。

六、その他

その他にも異文化間コミュニケーションの障碍の要因として見逃しにできないものがある。まず「論法、思考法のちがい」がある。今日われわれが「論理的に話を進めなければならぬ」というばあいの論理とは、アリストテレスに端を発した西洋流の理屈づけのことであり、東洋にはまた別の論理、思考法があった。

たとえば、日本でも言う、「柳に風折れなし」という考
え方など道教に源を発しているらしい。「弱い枝はしなる、
だから（折れないので）弱いとばかりは言えない」といっ
た類の論法なのだが、考えてみればおもしろい論理であ
る。このように、今日なお世界には、ずいぶんわれわれと
は違う論理をもつ文化が存在する可能性があるのだ。

つぎに「慣習のちがいをあげてみたい。これには日常
われわれが何げなく繰返し行なっていることのなかで異文
化間コミュニケーション⁽¹⁸⁾をややもすると阻害してしまうよ
うなものを含めている。たとえば玄関で靴を脱いでから上
がるのは日本では常識であるが、ヨーロッパは靴のまま上
がる。そういったことから、役割および役割規定 *role
prescription* といったことまで含んでいる。役割も強く文
化によって規定されるものである。端的な例は性役割であ
ろう。日本の中でも最近ずいぶん性役割および役割規定
が変ってきたのだが、民族が違えば予想もできない違いが
あるかも知れない。日本で学習した性役割の感覚で異文化
の異性に接したら、たいへん悔辱したという結果になるか
もしれないのである。これに関しては *M. Mead* が報告し
た、英米二国間の性役割規定の違いによる混乱など示唆的

な事例である [Mead: 一九四八年]。

また夫婦間の役割も文化によって異なる。日本の「男
（夫）中心主義」に対して、たとえば欧米では夫婦が単位で
ある。従って、欧米に駐在員などで出かけるときは妻の存
在が非常に重要となる。⁽¹⁹⁾ この海外における妻の役割行動と
いう問題は見逃しにできないと思う。

IV おわりに

二回にわたって「異文化間コミュニケーション序説」を
論じてきた。異文化間コミュニケーションをとりあげるの
は、観光、経済活動、留学等その目的をいろいろあわせて
年間三〇〇万人もの日本人が国を越えて出かけていくとい
う現実があり、コミュニケーションの立場からそれにアプ
ローチしてみたいからである。そうして日本史上未曾有の
体験がもたらす波紋は小さくないし、じっさい様々な問題
が生じている。つまり、異文化との交渉が下手だ、不慣れ
だと言われてきた日本人だが、いまやそれでは済まされな
い時代になったのである。国際社会にいかに対応するか、
言葉をかえれば、国際社会において平和な方法で生き残る

にはどうすればよいか、というのがわれわれの究極のテーマであり、副題を「国際社会と日本人」としたのはそうしたねがいをこめたつもりである。

そうした目的のために、まず現状を把握し、そこから問題点を抽出してみようというのが当面のわれわれの仕事である。だからI章(「異文化間コミュニケーションとは」)で概念規定したあとは、II章「異文化間コミュニケーションの生起する場面」として主なものを網羅的にあげてみたわけである。ここではパーソナル・コミュニケーションの形態をとる場合とマス・コミュニケーションの形態をとる場合とをわけて考えてみた。一般にはこれらが未分化のまま論じられるか、前者のみ論じられることが多いようだ。ともあれこの章で、今日の日本人が具体的にどのような異文化体験の場をもっているかを明らかにしたつもりである。

さてIII章では視点を變えて、より「臨床的」に、日本人が文化を越えてコミュニケーションする場合に、そのコミュニケーションの障害要因となるものにどのようなものがあるか、いままでにわれわれが知りえた範囲で挙げてみた。すなわち、円滑なコミュニケーションを望むなら、まずこうした障害要因のあることを知り、それを克服する必

要があると考えたからである。もとより「序説」であるので、想定されるもので大事だと思われるのはできるだけ入れておいた。おそらく多分に問題をはらんでいる分類であろうし、要因のとりあげ方も適切でないかも知れない。また国際化のさらなる進展によって、別の新しい問題が生じてくる可能性は充分にある。「本論」の作業をすすめていく段階で、より精緻化していかなければならない。

おわりに、読みにくい原稿を根気よく読んでくださり、数々の貴重な助言をしてくださった成城大学の築島謙三教授に厚く御礼申し上げます。

(注)

(1) 国際コミュニケーションに関しては第I章(『成城文

芸』八六号、拙稿、とくに四三頁)参照。

(2) 文化相対主義とはこの場合、それぞれの文化には独自の原理があり、すべての文化要素はその文化体系のなかでそれなりの機能をもっているのだ、という考え方をいう。したがって、たとえばAの文化はBの文化より「勝っている」(または「劣っている」とか、「良い」(または「悪い」といった価値判断はしない。

(3) コミュニケーション過程については、第1章(『成城文芸』八六号、拙稿、四五頁)参照。

(4) 日本人のもつ諸民族に対する偏見については「我妻、米山・一九六七年」等に詳しい。なお、国内にも被差別民は多いが、とくに差別される側から書かれた「金賢汀・一九七七年」は、「在日朝鮮人」の今日の問題を鋭くとらえている。また「経済大国」が喧伝されてからというものの新しく来日する人たち(とくに留学生など)がふえてきたが、彼らのうちアジアの諸地域出身者が日本人の偏見のために下宿を得るのに苦労しているという事実などは意外と知られていないようだ。「リー・ウッドホン・一九七八年」等参照。

(5) 松本重治の『上海時代』は、偏狭な人間観から解放された男の話としても興味深いが、当時の新聞記者の取材方法を知るとい意味でもマスコミ研究上貴重な資料である。

(6) 「柳・一九五四年、一五〜一七頁」。なお、原文は大正八年五月二〇〜二四日読売新聞所載。公けにはだれひとり朝鮮人を弁護することのなかったあの時代に、きわめて勇気ある発言である。こうした日本人の行動に関しては「旗田・一九六九年」とくに四二〜四六頁参照。

(7) たとえば、黒人が自分たちと同じ教室で学ぶのは反対だ

と思っている白人はいるが、事実上、(多くの学校で)黒人を教室から追い出すことはできないわけで、行動としては、同じ教室で学ぶことになる。

(8) 「崔在錫・一九七七年」とくに一〇五〜一三〇頁参照。

(9) つまり、一人で仕事をする場合は、たとえ国の内であっても、はつきりと自己を主張しなければ、いい仕事はもらえないし、いいポジションも得られない。必然的に口に出して相手を説得するという技術を習得することになる。こうしたことが異文化の人々との交渉の場で生きてくるわけだ。一方あくまで集団の一員として仕事をする場合は、自己を主張することはかえって好ましくない。つまり集団の和の保持が第一義なのである。だから異文化間の交渉のようにはつきりと言葉にして主張しなければならない場には慣れないといえる。

ただし、これはあくまで個人・個人の国際性の比較であって、結果として成しえる仕事量の比較ではない。

(10) 『成城文芸』八六号、拙稿、五二頁参照。なお、日本企業の海外進出に伴って、異文化の人々をマネジメントする際の困難が語られることが多くなった。そうした実態については、たとえば「全日本能率連盟他・一九七八年」が参考になる。これは日本企業と現地従業員(このばあい、AS

EAN 加盟五カ国」との「マサツ」を分析しており、きわめてユニークな労作である。

- (11) 日本人が自らの歴史に無関心（もしくは関心を払おうとしない）であるというのは、日本人が簡単に「反省」してしまうことと関係があるようだ。まず、「文明開化」の時期。それまでの日本は野蛮国だった、歴史はなかった、とまじめに考える日本人を見て外国人であるベルツは大いに驚いているくらいだ。（『ベルツの日記』岩波文庫版第一部上・二七頁参照）。そうして「こんどは第二次大戦後、いわゆる「皇国史観」への反省のためにまたいっぺんに日本史への関心がうしなわれた。この二つの時期の日本人の行動は日本人の「歴史観」をみごとにあらわしていると思われらる。

- (12) 日清戦争直後、親ロシア色を強める高宗の正妃閔妃を、一部の在朝日本人が妃のおつきの婦人たちもろとも斬殺、焼き払った事件。

- (13) 「長坂・一九七七年」。

- (14) このカルチュア・ショックに弱い性格に関しては、第二章『成城文芸』八六号、拙稿、六六頁（注20）に近藤章久の説を引いておいた。

- (15) 「同文同種」といわれた中国だが、同じ漢字を用いなが

らずいぶん意味の違う単語がある。一見同じに見えるからかえって誤解することも多い。実際の失敗例に関しては香港からの留学生、李活雄リ・ハクウに詳しい（「リー・一九七八年、とくに四二頁」）。

- (16) またたとえば双方が同じ言語（たとえば英語）を用いて交渉していても、その言葉の表面的な意味しか理解していないと、とんでもない誤解を生じることになる。いわば「辞書の理解の限界」（国弘・一九七〇年、八一〜八四頁参照）である。

- (17) たとえば、非言語的表現としての「ジャパニスム日本の微笑」〔Porter and Samovar: 一九七六年、二二〜二三頁〕。

- (18) たとえば、二〇年間ローマ（国連食糧農業機構）に滞在した藤波徳雄氏は「外国へ行って苦労するということがある」とすれば、言葉が半分或いは半分以下であって、相手の風俗習慣、mentalityを理解できるかどうかの問題が非常に大きい」として、おもにイタリア人の習慣とそれを読みこなすことのむずかしさについて要領よく説いている（国際教育振興会・一九七八年、二一〜二七頁）。

- (19) 海外駐在ビジネスマンの妻たちの行動、役割、考え方等については、たとえば「山本幸子・一九七八年、三〇七〜三一八頁」など。海外駐在員としての適性は、本人のみな

らず、同行する妻も考慮されなければならぬほど重要な問題であると思われぬ。

〔参考文献〕

- Allport, Gordon W., *The Nature of Prejudice*. Massachusetts: Addison-Wesley Pub. Co., 1953. 原谷達夫他訳『偏見の心理』(上・下)培風館、一九六一年。
- Barna, LaRay M., "Intercultural Communication Strumbling Blocks" in L. A. Samover and R. E. Porter (eds.), *Intercultural Communication: A Reader* (2nd ed.). Belmont, Calif.: Wadsworth Pub. Co., 1976, pp. 291-298.
- Belmont, Calif.: Wadsworth Pub. Co., 1976, pp. 291-298.
- 崔在錫『韓国人の社会的性格』学生社、一九七七年。
- Deusch, Morton and Marry E. Collins, "The Effect of Public Policy in Housing Projects upon Interracial Attitudes", in H. Proshansky and B. Seidenberg (eds.), *Basic Studies in Social Psychology*. New York: Holt, Rinehart and Winston, 1965, pp. 646—657.
- 匡謙 *Interracial Housing: A Psychological Evaluation of a Social Experiment*. Minneapolis: Univ. of Minnesota, 1951.
- 李 圭泰『韓国人の意識構造』、東洋図書出版、一九七七年。

Hall, Edward T., "Language of Space", *Landscape*, 10, 1960, pp. 41—42.

旗田 巍『日本人の朝鮮観』勁草書房、一九六九年。

入谷敏男『新社会心理学』、東海大学出版会、一九六九年。

Johnson, Sella K., *American Attitudes toward Japan, 1941—1975*. Washington, D. C.: AEI for Public Policy Research, 1975.

金山宣夫『国際適応訓練マニュアル』、産業能率短大出版部、一九七八年。

金 賛汀『祖国を知らぬ世代』、田畑書店、一九七七年。

国際教育振興会『NUCLEUS』Vol. 31, No. 2, 1978.

国弘正雄『英語の話し方』、サイマル出版会、一九七〇年。

リー・ワードホン『幸せな国ニッポン——中國人が見た日本——』、青也書店、一九七八年。

松本重治『上海時代』(上・中・下)、中央公論社、一九七四—七五年。

Mead, Margaret, "A Case History in Cross-National Communications", in L. Bryson (ed), *The Communication of Ideas*, New York: The Institute for Religious and Social Studies, distributed by Harper & Bros., 1948.

長坂寛 『隣の国で考えたこと』、日本経済新聞社、一九七七年。
中津燎子 『なんで英語やるの?』、文芸春秋社(文庫版)、一九七七年。

西山千 『誤解と理解——日本人とアメリカ人——』、サイマル出版会、一九七二年。

Parsons, Talcott, "Intercultural Understanding and Academic Social Science", in L. Bryson et al. (eds), *Approaches to Group Understanding*, New York: 1964.

Porter, Richard E. and Samovar, Larry A., "Communicating Interculturally", in L.A. Samovar, and R. E. Porter (eds), *Intercultural Communication: A Reader* (2nd ed.), Belmont, Calif: Wadsworth Pub. Co., 1976, pp. 4-24.

白水繁彦 「異文化間コミュニケーション序説(その一)」、『成城文芸』第八六号、一九七八年、四一〜七〇頁。

鈴木二郎 『白・黒・黄色——差別と偏見の構造——』、音羽書房、一九七二年。

我妻洋、米山俊直 『偏見の構造——日本人の人類観——』、日本放送出版協会、一九六七年。

山本幸子 「海外駐在ビジネスマンの妻たち」、『中央公論・経営問題』、一九七八年(秋季号)、三〇七〜三一八頁。

柳 宗悦 『朝鮮とその芸術』柳宗悦選集Ⅳ、日本民芸協会編、春秋社、一九五四年。

全日本能率連盟、人間能力開発センター 『発展途上国における日本経営の適応と展開に関する調査研究報告書』一九七八年三月。

※この他、前回(「序説(その一)」)に掲げた文献を参考にした。